



関西空港よりモンゴル航空直行便にて、草の海が果てしなく広がる国、モンゴルにやってきました。我々日本民族の祖先はきっとここからやってきたのだ、そう確信させる顔が空港を出た途端私たち一行を出迎えてくれました。首都ウランバートルは目立った高層ビルもなく、とても大らかさを感じさせる町です。首都でさえもこの大らかさ、これから訪ねる町もさぞかしと、とても楽しみになりました。

旅の2日目、南ゴビへと向かいました。空路約2時間、飛行機は滑走路のない砂漠のステップの平原に到着しました。そこには草原の国というモンゴルのイメージを一掃した風景が広がっています。荒涼とした景観、イヨリン・アム(鷲の口)と呼ばれる緑濃い溪谷が彩りを添える摩訶不思議な空間が待ち受けていました。灌木しか目にしない大地にはゴツゴツとした岩山が

鎮座し、その一方で涼やかな風が吹き抜ける溪谷。ここだけはモンゴルの中でも異色としか言いようのない風景です。モンゴルにもこういった景観があるのだということに、驚きと感動を禁じ得ません。ピクニック後は、恐竜の卵が展示されている小さな恐竜博物館を見学しました。そして夕食後には、美しい夕日に染まるモルツォック砂丘へ行きました。ゴビはモンゴル語で「短い草が生えている土地」という意味で、ここには山、森林、泉、砂丘、大草原といった生態圏が広がり、珍しい動物も多く生息しています。

南ゴビからウランバートルに戻り、次に訪ねたのは、想像通りの草原の世界に出会えるブルト近郊のフヌグゴビです。フヌグゴビキャンプ地は1996年の夏にオープンしたばかりの新しいキャンプ地で、ウランバートルから西に約300km、



1年中水河のあることで有名な鷲の口



恐竜の卵



雄大な砂漠が広がる南ゴビ



どこまでも続くモンゴル大平原



馬の放牧風景



大草原のキャンプ地



テント形式の伝統的移動住居「ゲル」



「ゲル」の内部

ブルドから約 10kmのところであり、モンゴルらしい草原の中のキャンプ地です。ウランバートルからバスでキャンプ地フヌグゴビへ行きました。途中、羊や馬の群れや、美しい花畑にバスを止めて写真を撮ったり、映画の撮影場所になった五つ岩山などモンゴルの大草原を楽しみながらバスは走りました。

翌日は、いよいよ乗馬体験、「ゲル」組立て体験、モンゴル料理教室、民族衣装試着体験、馬頭琴・演奏教室と、終日、モンゴル生活体験！まずは果てしなく広い草のベッドに横たわり、体全体で草の大洋を渡る風を感じました。そしてむせ返るような草の香りに包まれ、思い

っきり走り回ってみました。日本では味わえない開放感です。トレッキングで大草原を疾駆し、乗馬の合間をぬってツーリストキャンプにて民族衣装を試着したり、民族料理を作るなど、モンゴルの生活を満喫しました。また、モンゴルと言えば「ゲル」と呼ばれるテントが有名ですが、南ゴビだけでなくここでも「ゲル」に泊まり、かつ数人がかりで「ゲル」を組立てることにトライしました。そして遊牧民とともにディナー用の羊を捕まえ、遊牧民が捌いた羊と一緒に調理しました。何だか自分も遊牧の民になったような気分になりました。食後はモンゴルの代表的な民族楽器である馬頭琴をはじめとし

た珍しいモンゴル楽器による演奏を馬乳酒を飲みながら聴きました。モンゴルの遊牧民が一般的に飲む馬乳酒は馬の乳から作るお酒でアルコール度が低く(4%), いろいろな場で飲まれます。モンゴルの人にとってはアルコール飲料という感覚ではなく水代わりに飲んでいる感じです。眠れぬ時間, 「ゲル」の外に出て草の海に寝転び夜空を見上げました。星の散らばりの下限, そこが地平線です。星の輝きを遮るものは月の明かりだけ, 手を伸ばせば手のひらに星屑を掴めそうです。これこそ日本では絶対に感じられない感動でした。



ディナー用に羊1匹を捌く遊牧民



焼いた石を入れる羊肉の鍋料理



遊牧民が飲む馬乳酒というモンゴル酒



馬頭琴などのモンゴルの民族楽器による演奏



108の仏塔で構成されているエルデニゾー

フヌグゴビキャンプ地から日帰りで、旧モンゴル帝国の首都カラコルムを訪ね、エルデニゾー寺院を見学しました。カラコルムは1235年モンゴル帝国第2代皇帝オゴディーンが建設した、世界の文化や民族が集まる国際都市でした。しかし、今は見渡す限りの大草原の中にあり、まさに「兵どもが夢の跡」。大草原に忽然と姿を現すエルデニゾー寺院は、カラコルム帝国時代の建築資材を利用して1586年に建設されたモンゴル最大のラマ廟で、108の仏舎利に囲まれており、青空の下、参拝する人々を迎えています。種々の建築様式を包含し北アジア・モンゴ

ル文化の複合的性格の一面を象徴しているエルデニゾー寺院や亀跌(亀石)の残る遺跡などを見学した後、遊牧民の「ゲル」を訪問し、今でも遊牧生活をしている人々の生活を垣間見ながらキャンプ地に帰りました。遊牧の民は、日の出とともに目覚め、日没とともに一日が終わる、そんな素朴で温かい生活を続けています。彼らの生活はいたって質素です。もちろん電気機器は彼らの生活をより便利にしているようですが、大自然の中で暮らしている限り、あの草の海が限りない恵みと幸福をもたらしているのです。

首都ウランバートルに戻ってきました。草原



大草原の中に残る亀石



ウランバートルが一望できるザイサン丘



自然史博物館にある恐竜の骨

の町とは違う町並みが懐かしくもあります。市内観光は、ウランバートルが一望できるザイサン丘、ウランバートルの中心地スフバートル広場、恐竜の骨のある自然史博物館、ボクドハン宮殿博物館、ガンダン寺などを見学。そして夜は、サヨナラパーティ。

日本人と同じような顔で微笑みかけるモンゴルの人々は、底抜けに人懐こい民族であり、旅人をこの上ない居心地の良さで包んでくれます。夏の頃が最もモンゴルが過ごし易く、そして最も美しい季節です。風になびく草の海、満天の星空、温かく素朴な人々の生活。忘れかけてい



ウランバートルのボグドハーン宮殿博物館

た何かを思い出させてくれます。夏に旅するの ます。  
なら誇り高き遊牧民の国，モンゴルをお勧めし